

東京都立大学教授・心理学
諄摩 武俊

「また失敗しちゃったの。だめな子ねえ、あなたは」「うまくできたね。今日は運がよかったんだね、きつと」

「この家庭でもよく聞かれるしかり言葉であり、褒め言葉です。しかし、子どもの心の発達を考えたとき、この二つは、例外的な場合もありま

褒め方としかり方

ですが、あまりいい表現のしかたではありません。言うまでもなく、褒めることもしかりことも子どもには必要です。しかし結果的にいい褒め方としかり方があります。

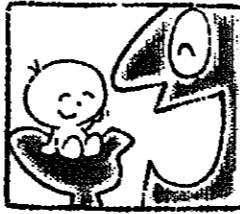
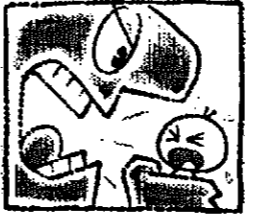
原則的に言うとき褒めるときには、それを成し遂げた子ども自身を褒め、しかりるときにはそれを成した子ども自身ではなく、子どものやったことをしかりるのがいいのです。しかりの場合から述べると、「やっぱりあなたは駄目ね」

「こんなこともできなくて、いったい何年生なの」「お友達達はみんなできるのに、なぜあなただけできないの」などと言うしかり方は好ましくありません。道具の使用法の間違い、問題の解釈のしかたの誤解、計算の過程での勘違い、相手の指示を注意深く聞いていなかったことなどが、「今回の失敗」の原因であったことを教え、こうすれば同じ失敗を繰り返すことはないだろうと励ますのが、未来につながるしかり方です。

大声で叱咤したり、面罵することも、厳しい反省を本人に求めるという意味で、著しい効果のあること

もありませんが、逆効果になることもあります。本人のやる気をなくさせ、劣等感を作り、い縮した性格にしてしまうようしかり方

り方はよくないのです。褒めるときは逆に、その子どもの努力、工夫、知恵、忍耐などが基礎にあったから成功したのだ、ということをはっきりと認めてあげてください。運がよかった、ついていた、まぐれ当たりだということや言い方も、また、こんなことはだれもができることのできるのあたりまえだという言い方も、その子どもにはよくありません。



内気で気の弱い感じの子どものときには、特に元気づけるような褒め方をしてください。さわやかに高揚した感情を本人の心の中につくり、自信を持ってほかの人や事柄に対応できるようにすることが褒めることの効果なのです。

私の青春を見守ってくれた「はざ木」

語る人

笠原秋子さん
(東笠場 三十八歳)



私の思い出は二十数年前、高校に通うため、バス停まで歩いた道路のわきに立ち並ぶ「はざ木」です。私は茨城県地区で生まれ育ったので、はざ木は見慣れていて幼いころは何も気にしなかったのですが、高校生時代のはざ木は印象深いものがあります。四季を通じて通い慣れた戸頭から平潟新田まで、道のわきのはざ木の風景が懐

私の思い出 あの時この場所

かしく目に浮かぶのです。冬の登り下校時の吹雪のとき、「あと何本、あと何本」と目的地まではざ木を数えながら、寒い雪道を歩いたものでした。春になるとはざ木は、青々と葉をつけ、通学途中の私を笑顔で見送ってくれているようでした。秋のはざ木は、いっばいの黄金の穂を背負って、目を楽しませてくれました。今では農業も機械化が進み、はざ木は見られなくなってきました。はざ木をたまに見かけると、楽しかったこと、苦しかったこと、青春の思い出がよみがえります。はざ木が立ち並ぶ懐かしい風景を、私の子どもたちにも見せてあげたい気持ちでいっばいです。



はざ木

戸頭から平潟新田への道路に、今「はざ木」は見当たらない

あなたの思い出を お寄せください

市内をはじめ、市外、県外、海外の心に残る思い出をお寄せください。あて先は、〒950-12 白根市大字白根1235 白根市役所企画調整課広報広聴係(☎033-33)です。お便りお待ちしております。

家庭看護法

赤 赤十字社新潟県支部 佐々木 成子

No. 10 排泄の世話

赤ちゃんと違い、お年寄りの排泄の世話は何かと気苦労の多いもの。少し待ってくださいたいというわけにはいかないことも多く、日に数回、またはそれ以上、さらに夜中と肉体的にもたいへんです。健康の三原則に、快食・快眠・快便があります。しっかりと食べてきちんと排泄があることは、健康を保持する上で、とてもたいせつなことなのです。しかしお年寄りはおしっこに対する気兼ねから、水分を取らなくなることがあります。その結果元気がなくなったりボケやすくなったりします。また排泄に対する過度の不安感から、尿が近くなったり、頑固な便秘になったりすることがあります。お



▲ふろしきなどを腰の下に通して持ち上げると楽です。



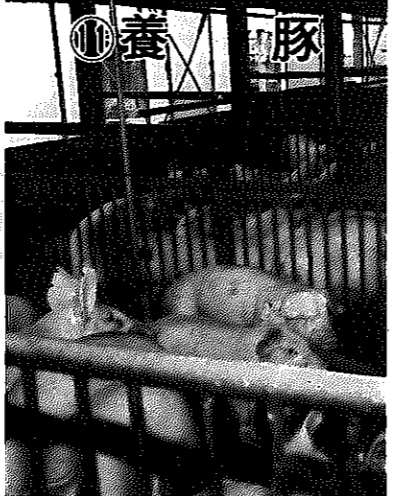
▼体を横向きにして当てる。



向こう側に座布団、毛布など(便器の高さくらいに折る)を置き、その上に腰が乗るように横に向ける。

世話をするときはお年寄りに不要の気遣いをさせないよう、温かいさりげない態度で接することがたいせつです。体が不自由でも、トイレだけは何とかして行こうという心の張り方は、心身の衰えを防ぐことになりません。手間がかかっても昼間はトイレまで歩けない場合は、ポータブルトイレを利用するとよいでしょう。寝床から起き上がれない人の場合は便器を使用します。全く腰の上がらない人の場合、当てるのに苦労します。図のようにして当ててもよいでしょう。便器が間に合わずに漏らしてしまふということはお年寄りにありがちなことです。しかし、すぐおむつを当てるのではなく、おもらしパットを当てたり、おしりの下に紙おむつや、おねしょシートを敷くなど、布団を濡らさない工夫をしましょう。できるだけ便器を使うようにし、おむつは出るのが分からないときの最後の手段としてのみ使いたいものです。

しろねの農産物



豚肉は輸入自由化が昭和四十六年に行われ、養豚農家は非常に厳しい条件下で生産を続けてきました。そのため、養豚農家は数に減少を続け、現在市内の養豚農家は三十九戸となっています。これらの農家は、経営規模の拡大と合理化、品質の向上を進め経営の改善に努めてきました。三十九戸の豚肉生産量は、県下第四位の生産量を誇ります。養豚農家が頭を悩ませている問題に、豚肉と競合する牛肉の自由化があります。スーパーではすでに牛肉の売り場面積を広げはじめました。これに対処するには、安全でより良質なものを安く生産していかなければなりません。それには、詳細な経営分析も必要となっています。養豚というどうしても「おい」が問題になります。しかし、私たちの食生活には欠かせないものです。おいを克服し、さらに近代化を進めるため、養豚農家は研究に余念がありません。

生産者の声



吉原 富一さん
(上笠巻・44歳)

北海道から九州まで、全国の養豚農家とパソコンやファクスで情報を交換し、有益な情報を早くキャッチして経営に生かそうと努力しています。養豚という悪いイメージが先行するので、私たちが変えていかないと。